

Fate/Kaleid caster ド  
ラまた☆リナ外伝・星  
を紡ぐ武器を求める者

猿野ただすみ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

拙作「Fate/Kaleid caster ドラまた☆リナ」のゲストキャラ、星見ミリイと青川慧のお話。

もし、「スィーフイード世界」だけでなく、「ヴォルフイード世界」も接触してきていたら？

もし、この世界に魔王の武器が流れ着いていたら？

※この作品はロスユニ要素がありますが、舞台となる世界はあくまでプリズマ☆イリヤです。

また、ミリイや慧はこちらの世界におけるミレニアムフェリアノクターンとケインブルーリバーですが、原作とはだいぶ変質（笑）しているので、一応オリ主タグを貼りました。

# 目次

遭遇	1
天使の映し身	16

## 遭遇

私立穂群原学園初等部。調理実習も終わりに差し迫った頃。

「出来た！」

一切れのパウンドケーキ。それを食品用フィルム製の袋に入れ、その口を何度もリボン結び直しながら、ようやく納得がいった形で閉じ、ふう、と一息吐く金髪の少女。

名前は星見ミリイ。

「随分と熱心だったわねー」

そう言ったのは、今回同じ班でパウンドケーキを作った稲葉リナ。時々大人っぽい発言をする、少しだけミステリアスな赤毛の少女だ。またの名を、「身体は子供、心は魔王」の稲葉リナ。ただし怒らせなければ、ごく普通の元気な女の子だ。

「そんなに青川くんに食べてもらいたいの？」

「そうよ、悪い？」

リナがからかうように言うのと、頬を染め、怒った表情でミリイは言い返した。

「何よ、つまらない反応ねー」

「さつき散々からかつといて、よく言うわね」

実はリナ、パウンドケーキ制作中に、ミリイと青川慧との関係について散々からかったのだ。

ミリイにとって、はどこに当たる慧は気になる存在。純粹に親族としてなのか、それとも恋愛感情なのかはわからないが、もつと近くにありたい。そう思える存在だ。

「……あー、ごめん。ちよつと行き過ぎだったか」

リナが謝ると、ミリイは嘆息し言った。

「もう、いいよ。おかげで踏ん切りがついたっていうのもあるしね」

最初、パウンドケーキを作り始めたときはどうするか迷っていたミリイ。しかし、リナのおかげで吹っ切ることが出来たのだ。結果論ではあるが。

「……ところでリナも、そのパウンドケーキ、誰かにあげるの?」

リナの手には、綺麗に包装されたパウンドケーキがある。

「ああ、これは士郎さん…、イリヤのーちゃんにね。料理教えてもらってるお礼よ」

イリヤは本名、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンという銀髪に赤い瞳のハーフの少女だ。最近は従妹のクロエ・フォン・アインツベルンという子も転入してきて、クラスはさらに賑やかになっていた。

「ふうん…」

ミリイはリナの包装を見てから、自分が包装した物へと視線を移し。

はあ…

大きいため息を吐くのだった。

放課後。ミリイは、慧がいる3組の前までやって来た。とはいえ、これは別段変わった行動ではなく、先にホームルームが終わった方が終わらない方のクラスに赴き、一緒に下校するという一連の流れである。

これでまことしやかな噂が流れないはずはない。ないのだが、それに気づかないこのふたりは相当鈍感か、危機管理能力が欠如してるかのどちらかなのか。

「よっ、お待たせ」

教室の中から赤毛の少年が現れる。青川慧だ。

「さあ、帰ろうぜ。ばーちゃんとの稽古もあるしな」

慧は祖母アリシアから剣術を学んでいた。

それは別にいい。ミリイも祖父の妹、大叔母に当たるアリシアのことは好きだ。しかし慧のそれはただのお祖母ちゃんっ子というレベルではなく、グラントマザー・コンプレックスと呼ぶに相応しいもので、ミリイも少しヤキモチを焼くほどだ。

「何だ、ミリイ。何不貞腐れてんだ？」

「別に！」

ミリイはふいっとそっぽを向く。そんな様子に思案顔になる慧だった。

いつもの帰り道。いつものごとく、ショートカットするために公園の中を歩いて行くふたり。

「……ねえ、慧」

ミリイが慧を呼び止める。

「どうしたミリイ。……トイレか？」

「なっ!? 何デリカシーの無いこと言ってるのよ!」

「わっ、待てミリイ、冗談だ! あまりにも真剣な表情をしたから、和ませようとしただけだっけ!」

鬼のような形相でワナワナと震えるミリイに、慌てて言い訳をする慧だが、冗談にしてもデリカシーが無いのは間違いない。

「まったくもう……。雰囲気なんてあつたもんじゃない……」

「……はい!」

ミリイは鞆から出した物を、慧に投げて渡す。



「うわつと…。これは、パウンドケーキか？」

「それ以外の何だったの。」

今日の調理実習で作ったのよ。慧にもあげる」

「そうか。サンキューな」

突つ慳貪な態度のミリイに、慧はお礼を言う。ミリイはそっぽを向いたままだが、耳が赤くなつてたりする。慧は気づいてないが。

「ところで、また鍋を爆発させたり、電子レンジを黒焦げにしたりしてないだろうな？」

「そんなことしてないわよ」

慧の疑問をハッキリと否定するが、実はおたまを一つ使用不能にしている。まあ、嘘は言っていないのだが…。

「ならいいんだけど…。」

まあ、ミリイの料理が美味しいのは確かだし、これはありがたく頂くよ」

そう言つてニカツと笑う慧を見て、ミリイは少し、心がホワツとする気がした。

「さ、行こうぜ」

慧が促して一歩踏み出した瞬間。ふたりに得も言われぬイヤな予感が走る。

咄嗟に飛び退くふたり。

次の瞬間には、ふたりが立っていた場所から黒い何かが噴き上がる。

「な……に？」

「何が起きてんだ!？」

ふたりが眩くと。黒い何かの中心から、真つ黒な身体に顔だけが美形な青年の、十二モノかが現れた。

「随分と勘の鋭い人間ですね」

ソレはニタアと笑いながら言った。背筋が凍る思いがするふたり。それでも慧は、そいつに言葉をぶつける。

「お前は、何だ？ 俺たちに、何をしようとしたんだ!？」

「私が何者かなど、どうでもいいでしょう？」

何をしようとしたのかと問われれば、食事、でしょうね」

「食事？ ……まさか!？」

ふたりは、その想像に戦慄する。するとソレは、その笑みをさらに深くする。

「そうですね。貴方方のその四肢を引き裂き、苦痛に歪むその表情を見ながらの食事というのも、なかなか乙なものでしょう」

ソレの言葉によって、ふたりは恐怖に支配されていく。

(せめて、ミリイだけでも……！)

そうは思うものの、慧自身が恐怖によって言葉すら発せられない状態である。

「さあ、どちらが先に……」

ソレが一步、踏み出そうとしたその時。

カツ！

地面に突き刺さる、柄の短い剣。その剣はソレがいた場所を通り過ぎ突き刺さったもの。そう、いた場所を。

ソレは一瞬にして姿を消し、剣を躲していた。

突き刺さった剣は、ふっと刃が消え柄の部分花落下し、カランと音を立てる。

『やれやれ、不意討ちとは美しくないやり方ですね』

姿を消したままソレが言うと、植え込みの木の後ろから長い銀髪の可愛らしい、ふたりと近い年くらいの少女が姿を現した。

(……イリヤ?)

ミリイは一瞬、クラスメイトのイリヤと見間違えたが、瞳は赤くないし、何より顔だちは東洋人寄りだ。イリヤが西洋人形だとすれば、彼女は銀髪の日本人形。そんな感じである。

「不意を突いてそちらのふたりを襲うあなたに、言われたくはありません」

少女は、先程までソレがいたところを見つめながら言った。

「それにあなたの言う食事とは、生命が放つ負の感情のことでしょうか？」

『貴女は、何者ですか?』

姿を現しながら、ソレが尋ねる。

「私の名は「キャナル」! この身体を依り代として、この世界に舞い降りた者!!」

「まさか、「ヴォルフイード」の手のものですか!」

少女の名乗りに驚愕の色を浮かべるソレ。

少女は、羽織っていた夏物のジャケットから拳銃を取り出し発砲する。

パシユツ! パシユツ!

その軽い音からもわかるように、彼女…、キャナルが扱うのはBB弾式のエアガン。

一見巫山戯ているように見えるが、その内の一発がソレの腕に当たると。

ばじゅ!

!?

いやな音を立て、その部分から煙のようなものが立ち上がる。

「……発射管の内側に魔術処理を施して、弾に聖属性の加護が付加されるようにしてあります。」

あなたたちには、痛いでは済まされないのでしょう?」

そう言いながら、銃を構えるキャナル。しかしソレは、にたりと笑う。

「……そうですね。確かに思った以上のダメージを受けてはいます。」

しかし数発程度なら問題ありませんし、何より、ここから動かなかった私に何度も撃ち込んで、実際に当たったのはたったの一発。

貴女にその武器は合っていないようですが…？」

「~~~~~！」

キャナルは悔しそうな表情になる。

「それに…」

ソレはスツと消えたかと思うと、次の瞬間にはミリーの後ろに現れ、彼女の頭に左手を乗せる。ミリーは恐怖のあまり青ざめ、その身を震わせる。

「こうすれば貴女も、下手に手出しは出来ないでしょう？」

「くうっ……！」

人質を取られ、自分の不甲斐なさに奥歯を噛みしめるキャナル。

「いいですね。この人間の恐怖の感情。そして貴女が感じている慚愧の念。それと…」

「ミリーから離れるオ！」

慧はミリーを助けんと、ソレに向かって体当たりをしようとするも、右手の一振りであっさりと吹き飛ばされてしまう。

「この怒りの感情。大変美味ですね」

ソレがまた、にたりと笑う。

「くそっ……!」

慧が手をつき身を起こす。

コツリと、指先に何かが当たる。

「ミリイから……」

慧はそれを掴みながら立ち上がり。

「離れろって……」

ソレに向かって駆け出し。

「言ってるんだろおっ!!」

叫んだ瞬間、手に掴んだそれ……、剣の柄から刃が形成される。

「何!?!」

ソレは驚き一歩下がるが、慧が振り抜いた剣がソレの左腕を切り落とす。切り落とされた腕は、黒い霞となって空間に溶けていった。

一方ソレの左腕は、瞬く間に再生されていく。

「大丈夫か、ミリイ!?!」

「う、うん……」

駆け寄り声をかけた慧に、ミリイは小さく頷いた。

「……おのれ」



キャナルは眩き、ふう、と息を吐く。

「あんた、一体……」

「私は……」

慧の洩らした言葉に応えようとするも、キャナルは急に膝をつく。

「おい、あんた、大丈夫か!？」

慧が慌てて駆け寄ろうとするが、キャナルは右手を突き出し静止をかける。

「連日の搜索の無理が祟った様です。まさか、これを起動するだけでこの様になるほど、力を消費しているとは思いませんでした……」

「搜索？ あんた、一体何を……」

「済みませんが、表に出ているのも限界です。後は神名かみなに聞いて下さい……」

それだけ言うと、キャナルは頭こゝろを垂れる。そして。

「髪の毛が黒く……」

ミリイが小さく呟いた。

彼女が言うとおおり、キャナルの銀色の髪の毛が黒く染まっっていく。

やがて、髪の毛の全てが黒く染まり、再び彼女は面おもてを上げる。その表情は先程までの気の強さを滲ませたものではなく、年相応のあどけないものだった。

「……あんたは……」



慧が再び尋ねると、少女はニッコリと微笑む。

「わたしは、黒神くろかみかな神名かつていいいます」

少女…、神名の自己紹介に、ミリイは少し首を傾げ。

「黒髪？」

と云うその発言に、今度は神名が首を傾げ、やがて言ってる意味に気づきクスリと笑う。

「黒神は髪の毛の髪じゃなくって、神様の神だよ」

それを聞き、ああと頷くミリイ。

「腹五社神社はらごしやの埋没鳥居がある、あの黒神ね」

「……え？ 腹五社神社、知ってるの？」

私は苗字の関係で知ってたけど……」

「お前、神社仏閣なんて詳しくあったか？」

以外な知識の出所に驚くふたり。

「違う違う。今、お祖父様が神社仏閣の参拝にはまってて、この間九州を巡った内のひとつがそこだったのよ。神社も地名も変わってたから、それで覚えてただけ」

ゲイザーコンツェルンの会長、渋い趣味である。ちなみに会社名は、ミリイの祖父が日本に帰化する前の名前、アルバートⅡヴァンⅡスターゲイザーから取られている。現

在は星見貴光という日本名を名乗っているが。

閑話休題。

「そうだったんだ。」

「……あの、それでふたりは誰ですか？」

言われてふたりはハツとする。

「すまん、自己紹介がまだだったな。」

オレは青川慧。穂群原学園初等部の5年生だ。

さつきは助けてくれて、ありがとな」

「わたしは星見ミリイ。同じく穂群原学園初等部の5年生。慧とははとこ同士で幼馴染みよ。」

あなたのおかげで、ふたりとも無事でいられたわ。ありがとう」

ふたりの自己紹介とお礼に、しかし神名は表情を曇らせる。

「わたしは、何もやってないよ。ふたりを助けたのは、キャナルだから」

「え……？」

神名の、自虐的なニュアンスを含んだ発言に、ミリイはどのような言葉をかけたらいいのかわからずに戸惑ってしまう。すると。

「んなことあ知るか！」

「ちよつと、慧!？」

いきなりの暴言に、思わず非難の声を上げそうになるミリイ。だが。

「オレたちは、まだ何にも聞かされちやいねえ。そんな状況で、『わたしは何もしてません』って言われて、『ああ、そうですね』なんて言えるわきやねーだろ!」

そのとおりだった。神名の言い分は、彼女の中での自己完結でしかない。

「『キヤナル』…、だったか? アイツが言つてたとおり、まずは説明してくれ」  
「でも…」

何かを言おうとする神名の、その言葉を遮つて慧が言う。

「言つとくが、『巻き込みたくない』てのは無しだからな。オレたちは充分に巻き込まれてるし、何よりオレが首を突っ込みたいんだからな」

「わたしもだよ!」

ミリイも激しく同意する。あんな怖い目にあつたというのに、芯のとても強い子である。

自分の気の弱さを知っている神名としては、二人が見せるそんな強さもコンプレックスなのだが、同時に憧れでもある。だからこそ、神名の中にはキヤナルがいるのだが。

「……わかつた。それじゃあ話すよ。わたしとキヤナルのこと」

神名は、決意を込めた表情で二人に言った。

## 天使の映し身

穂群原学園初等部。星見ミリイは教室の席で物思いに耽っていた。それは勿論、昨日の出来事についてだ。

自分と青川慧を襲った、謎の存在。そんな二人を助けてくれた少女。ハッキリ言っても現実的ではない出来事であったが、幸か不幸かそれを証明する物を、ミリイは所持していた。

ミリイの学校指定の鞆の中には、助けてくれた少女が使用していた、アレにダメージを与えることが出来るエアガンが入っている。護身用にと持たせてくれたのだ。

ミリイは少女の、黒神神名の説明を思い出していた。

神名は決意の表情を浮かべ言った。

「わかった。それじゃあ話すよ。わたしとキャナルのこと」

それを感じ取ったミリイと慧も、真剣な面持ちで頷く。

「わたしは、民間陰陽道おんみょうどう黒神流の家に生まれたんだ」

「民間、おんみようどう…」

「……つて何だ？」

二人が首を傾げる。だが神名はこういう反応を予想していたために、別段気にする様子もなく説明をした。

「陰陽道は、古い時代からある学問だよ。中国発祥の陰陽説いんようせつと五行思想ごぎょうしきょうを組み合わせたもので、地学、気象学、天文学、……そういったものを組み込んだ総合学なんだ」

妖怪退治、悪霊退治モノに登場する陰陽師おんみょうしのイメージで勘違いされやすいが、陰陽道とは本来、立派な学問である。また陰陽師は、宮中の陰陽寮おんみょうりょうに所属する役人でもあったのだ。

「それで当時のその学問の中には、今で言う占いやお祓いなんかも含まれてたの。本来それは、宮中の帝みかどや貴族のために行われてたものなんだけど、江戸時代くらいに民間へと技術の一部、特に占いやお祓いといったものが流出したんだよ」

「つまり黒神流つてのは、その民間に流れた技術を継承している内のひとつつて事か」  
「うん」

短く肯定して頷く神名。

「わたしの家は所謂祓い師なんだ。お父さんもお兄ちゃん達も、立派な陰陽師。だけどわたしは、陰陽の技術わざが上手に使えない。わたしにはお祓いなんて出来なかった。だから

ら、わたしだけ家に残されるのなんていつものことだった。

……だけどそんなある日、いつものように家にひとりでいたとき、それは起きたの」  
その時、今まで沈んだ表情だった神名に、笑みが浮かぶ。

「わたしが修練場でひとり術の練習をしていたら、突然目の前が輝きだして、白い翼を生やした女の人が現れたんだ」

「翼を生やした!?!」

「それってまるで、天使じゃない!」

ミリーの言葉に、神名は笑顔になる。

「うん、言ってたよ。『私は天使キャナル』って。

キャナルは異世界の神様に遣える天使で、魔王を倒すための武器を回収するために来たんだって」

「魔王を倒す武器…」

やっぱり男の子、「魔王を倒す武器」などという、先程の状況がなければただの胡散臭い話に、好奇心を滲ませた表情で呟く慧。一方のミリーは、当然男のロマンなどわかるはずもなく、ただ疑問に思ったことを神名に尋ねる。

「ねえ、どうしてそんな異世界の武器がこの世界にあるのよ?」

「うん…、キャナルの説明だと…」

前置きをして神名は語り始めた。

「キャナルがいる世界では、漆黒の竜神ナイト・ドラゴン「ヴォルフイード」と闇を撒くものダーク・スター「デュグラディグドゥ」が戦っていたんだって。

闇を撒くものダーク・スターが望むのは、自分達を含めた続べての存在もを虚無へと還すこと。漆黒の竜神の望みは世界の存続。

その戦いは、闇を撒くものの勝利で決着が着いた、はずだった。だけど闇を撒くものは暴走して、自分を滅ぼせる力を秘めた五つの武器、ラクト・エッセンス「瞬撃槍」ネザード「毒牙爪」ゴロンノヴァ「烈光の剣」ボイデイガー「破神槌」ガルヴェイラ「颯風弓」を作って、様々な世界にばら撒いたんだって」

「そのひとつが、この世界に？」

「うん」

ミリイの疑問とも確認ともつかない言葉に頷いてから、神名は握ったままの棒、光の刃を生み出した剣の柄を二人に見せる。

「これもその武器のひとつ、「烈光の剣」だよ。レプリカだけど」

「レプリカ？　そういうやさっきのヤツも、そんなこと言ってたな」

慧は先程、神名…、いや、キャナルがアレに斬りかかっていったときのことを思い出しながら言った。

「本物は、キャナルが持つてるから」

「? キヤナルがつて、どういうことだ?」

「キヤナルはあなたの前に現れたんだよね?」

「……話が、逸れちゃったね」

そう言うと、一つだけ、ただし深く息を吐いて、神名は話を続けた。

「わたしの前に現れたキヤナルは、精神だけの分身みたいなものなんだ」

「分身?」

聞き返す慧に、神名は頷く。

「こっちの、魔術の世界の常識では、昔の英雄が死後、英霊として座に至るらしいんだけど、その英霊の魂が分身として召喚されたりするんだって。それを説明して聞いてみたら、それに似たものだって言ってたよ。向こうのキヤナルは生きてるみたいだけど」

「な、なるほど?」

「ちよつと難しいけど、なんとか理解したわ」

頭を抱えながら応える二人。名誉のために記すが、二人とも学校の成績はそれなりに良い。ただしあくまで小学生。思考も、知識も。どこぞの、サブカルチャーに精通した銀髪ハーリーの様にはいかないのだ。

因みに英霊の座には時間の概念がないので、必ずしも昔とは限らないのだが、ここでの説明においてはなんの問題もないことである。



「キヤナルの分身は、本体が持つ「烈光の剣」<sup>ゴルトンノヴァ</sup>の、そのレプリカを持ってこっちに来たんだ。闇を撒くもの<sup>ダークスター</sup>の部下、魔族も同じくこっちに来てる可能性があったから。……でも」

「でも?」

聞き返す慧。

「精神だけの状態だと、物質世界ではその存在をいつまでも保ってられないんだって。だから何か依り代が必要だったんだ。」

……だから、わたしの身体を貸してあげたの」

「つまり、あなたの身体の中に「キヤナル」がいるって事?」

「うん」

神名はこくりと頷いた。

(……寄生虫?)

かなり失礼なことを思う慧。そんな事は露とも知らず、神名は話を続ける。

「それに対して魔族は精神生命体で、精神世界面に実体があるから、ある程度の力がある魔族は物質世界でも存在を保ってられるんだって」

言ってしまえば、魔族は自力で第三魔法・魂の物質化が出来てしまうのだ。

「そんな魔族を攻撃するには、精神に直接ダメージを与えるしかないんだ。それが出来

るのが、青川くんが今持つてる黒鍵とこのエアガン、そして「烈光の剣」のレプリカだよ」

「ああ、そうだ。エアガンと「烈光の剣」の説明は聞いたけど、こいつについては聞いてなかったな。それで、こいつは一体なんだ？」

慧は手に持ったそれを、ゆらゆらと振りながら尋ねる。

「それは黒鍵って言っつて、聖堂教会の代行者、……教義に大きく反する存在を始末する人達が好きで使う武器だよ」

「……なんか今、物凄く物騒な言葉が聞こえた気がするんだけど」

「言うなミリィ。俺も思ったけど、ここは聞き流すんだ」

少なくとも、そっち方面に深入りしないのは正解である。

「えっと、黒鍵に魔力を込めると刃が出来るんだけど、キャナルが黒鍵を改良して、精神力で刃が出来るようにしたんだ。「烈光の剣」のレプリカを造ったときの応用だっつて」

「なんか天使って凄いわね」

「と言うより、異世界技術がすげえ」

どこぞの異世界転生者も黒鍵を改良していたので、慧の意見もあながち間違っつてはいない。

「キャナルは、「烈光の剣」と改造した黒鍵、エアガンを持って、毎日この冬木市で

「ダーク・スタ闇を撒くものの武器を探してて、そして今日、あの魔族とあなた達ふたりに会ったんだ」  
「そうだったんだ」

紆余曲折しながらの説明に、ミリイはようやく、納得したと頷いた。

「だから、わたしは…」

「ああ、やっぱり黒神のお陰だな！」

「……え？」

慧の力強い言葉に、神名は驚き、目をしばたかせる。

「だって、黒神がキャナルに身体を貸してやったから、キャナルは存在していられるんだろ？　そしてそのお陰で俺達は、あの魔族から助けられたんだ」

「そうね。確かに助けてくれたのは、キャナルかも知れない。でも、そのキャナルを助けてるのは黒神さんよ？　だからやっぱり、黒神さんのお陰でもあるわ」

「あ…」

ふたりがかけてくれた言葉に、神名は感極まり泣き出してしまったのだった。

その後別れ際に、護身用にと慧に黒鍵、ミリイにエアガンを渡されて今に至っている。  
(魔族に、魔王の武器かあ…)

未だに信じ難いものの、魔族の手が自分の頭の上に置かれた感触は、今でもはつきりと憶えている。

「どうしたの、ミリイ。難しい顔して。愛しの青川くんにフラれちゃった?」

物思いに耽るミリイに、リナが声をかけた。しつかり弄ってくることを忘れない辺りがリナらしい。

「別にそんなんじゃないわよ。リナこそイリヤのお兄さんとは上手くいってるの?」

別に何か知っているわけでもなく、ただ、言われっぱなしが嫌だったので、たまに話に挙がるイリヤの兄を引き合いに出したただけだった。

「……………は? なんでそこで士郎さんが出てくんの?」

妙な間を開けて聞き返すリナ。頭と口が回るリナらしからぬ、微妙な間。しかし浮かべているその表情は、本当に心当たりがない様にしか見えない。

(あれ? もしかして、本当に…? しかもリナ自身は自覚してない?)

思わずニンマリと笑うミリイ。

「ちよつと、どうしたのよミリイ!?!」

「んーん、別にいい?」

からかいポイント発見、と内心でガッツポーズしているミリイだった。

放課後。慧とともに校門に差しかかると、そこには。

「青川くん、星見さん」

「黒神」さん」

神名が門柱に背を預けて待ち構えていた。その衣装は、穂群原小の制服姿である。

「……当たり前つちや当たり前だけど、やっぱり穂群原小の生徒だったんだな」

慧の問いに、こくりと頷く神名。

「改めまして、穂群原小学校5年2組の黒神神名です」

改めての自己紹介をし、ペこりとお辞儀をする。

「……それで黒神さん、何か用事なの？」

ミリイが尋ねると、神名は再び頷き返す。

「キャナルが、しばらくの間は家の中でも、武器を肌身離さず携帯するようになって。魔ぞ  
…、アレは空間を渡って、どこにでも現れるから」

そう注意を促され、思わず自分の鞆に意識が行くふたり。

「うん。わかっ…」

そしてミリイが応えきる前に。

「あら、ミリイじゃない」

後ろから声をかけられ振り向くと、そこには三人の少女がいた。

「クロ、イリヤ、美遊……」

横文字苗字の三人だ。声をかけたのはクロこと、クロエ・フォン・アインツベルンだった。

「ミリイはアオガワくんと下校イベント中？」

イリヤこと、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンがニヤニヤしながら尋ねる。どうやら昨日リナが言っていた「クラスのみんなには筒抜け」と言うのも、あながち間違っていないみたいだ。もつとも、ミリイは別に慧と付き合ってるわけではない。将来的にはわからないが。

「イリヤ、下校イベントって何？」

美遊・エーデルフェルトの疑問に、イリヤは有りもしない眼鏡をくいつと上げる仕草をして説明を始めた。

「下校イベントとは、男女ふたりで帰宅すること。それはギャルゲーにおける、お互いの仲を親密なものにするための、重要なイベントのひとつ。」

① 下校イベント!!

② 連絡先の交換!!

③ デート!!

④女子からの下校イベント!!

⑤ ③④の繰り返し!!

こうやって恋愛は高まっていくものなの!! ゲームでは!!

「あなたはどこの落とし神よ?」

呆れ顔でツツコミを入れるクロエ。

「大体、連絡先の交換も何も、わたしと慧は親戚なんだから、元から連絡先知ってるし。

二番目で破綻してるわよ」

ミリイ自身も冷静に突っ込む。と、そこへ。

「あの、青川くんと星見さんって、お付き合ってるの?」

神名が興味半分、驚き半分で尋ねてきた。

「いや、親戚同士で仲が良いから、周りがそんな事言ってくるだけだって」

「ホント。なんでみんな、くつつけたがるのかしら?」

と言いつつも、あつげらかんと答えた慧にモヤモヤを募らせるミリイである。

「……それじゃ、わたしでも」

ぼそりと呟く神名。若干意識が内にいっていた為聞き逃したミリイだが、耳聡い銀髪擬似姉妹は聞き逃さなかった。

「ところで、貴女はどちらさんかしら?」

「アオガワくんのお友達？」

神名に詰め寄るクロエとイリヤ。ミリイではなく、慧の名前を出す辺りがミソである。あからさまでもあるが。

その勢いに押されて、神名は門柱にピツタリと背中を預ける。

「あ、あの、わたし、黒神神名って…!?!」

「ええっ!? 『黒神』って、黒神めだかと同じ『黒神』!?!」

「え、黒神めだかって…?」

イリヤのオタク発言大爆発である。残念ながら神名は、「めだかボックス」を知らなかったみたいだが。

「ほら、ふたりとも。黒神さんはちよつと内気だから、あまり捲したてないで」

見かねたミリイが止めに入ると、ふたりは「ちえーっ」と言いながらも引き下がる。

「美遊、ふたりの監視、お願い」

「わかった」

「美遊ううう!?!」

美遊の対応にショックを受けるイリク口だった。



じゃあ、と三人が去っていった、その後。

「あの、青川くん、星見さん、ちよつと……」

神名は声をかけて歩き出す。ふたりは訳もわからず着いていくと、昨日の公園までやってきた。

神名は辺りを見渡し、他に誰もいないのを確認すると、黒い髪がすうつと銀髪に変わる。

「……キャナルか？」

「はい」

慧の問いに、キャナルが頷いた。

「わざわざキャナルが出てくるなんて、何かあったの？」

「何か、と言うか、私と神名が気になったことがあります」

どちらか片方ではなく、ふたりが気になったと聞いて、少し緊張する慧とミリイ。

「先程の、小麦色の肌の少女は何者ですか？」

「うん？ クロの事？ クロエ・フォン・アインツベルンって名前のクラスメイト。イリヤ……、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンっていう一緒にいた、顔がそっくりで色白の子と従妹同士って話だけだ」

ミリイの説明に、キャナルは軽く曲げた人差し指を顎に添えて考え込み、そして。

「おそらくそれは、作り話ですね」

「えっ!？」

キャナルの発言にふたりが驚いた。

「彼女、クロエさんからは、私に…、いえ、むしろ魔族に似たものを感じました」

「魔族!？」

更に驚くふたり。

それ程親しいわけではないが、それでも曲がり形にもクラスメイト。魔族扱いするキャナルを、ミリイは恨みがましく睨む。

「……別に、彼女が魔族だと言っているわけではありませんよ。ただ、あの身体は本物の肉体ではないように思えます。それこそ魔族のように、精神を物質化している、そんな感じがするのです」

「精神の、物質化…」

予想外の事に、今度は戸惑うミリイ。

「で、結局どうすりゃいいんだ?」

「どうもしません。クロエさんが物質化した精神体というのは、あくまで私と神名の推測に過ぎませんから。」

ただ、クロエさんがどのような存在かわからない今、もしもの時の為にも知っておい

て貰いたかったのです」

「……そっか。心配してくれたんだ。

そうだね。知り合いを疑いたくはないけど、念のため注意しとくわ」

キャナルに感謝をし、でも、と思う。

（もしもクロがキャナルの言うとおりだったら、イリヤも何か関わってるって事？）  
イリヤにまで疑念が浮かび、自己嫌悪するミリイだった。